

刊夕日五廿月五

常 警 日 新 聞

定価一冊五圓
 月刊五圓
 日曜祭日の翌日休刊
 発行所 常警日新聞社
 印刷所 常警日新聞社

入信とは何ぞや

眞 繼 雲 山

信心が得られたら嬉しいに相違なく、歡喜は信心の相であり得るも、歡喜即信相といふことを得ず、泥棒が首尾よく他人の品物を盗み得ても矢張り喜び得るであらう。

また信心は必ずしも歡喜を伴ふとは限らず、喜び得ない入信も有り得ると思ふ尤もこれには多分の但し書を要する、信に入りて悲しいといふ筈はないが人生は苦の世界である以上、人間にはいろいろの惱みがある寧ろその苦惱で綴られたものが人生だといふてよいのであるから、人間に悲涙ありて不思議はなく、悲涙のうちには佛を拜するところこそ人間の宗教はある。

無信の人々がその生老病死に當面して悲しむのは無理からぬが、然らば入信の上はその生老病死も悲しくはないかといふにさう詭らへたやうにはゆかぬ。若し生老病死、天災地變に當面してそれが苦しいといふ入信の人ならばそれは瘡を我慢にあらずんば恐らくは虚偽であらう。

のが人間としてのまことの姿である。

然らば入信は無益かといふに、無信の人々の苦惱には、それを客観化するゆとりがない。自分の全體が行詰まるのであるから待つたがない。丸で暗闇の火底へ突き落されたやうなものである。そこへゆくといふの

後には突き落されぬ別の自分がある、その別の自分にも涙はあらうが、その苦しさを悲しさは彼岸への白道に通じてゐる。一切は業の展開なりと知らせて頂くところからである。若し喜ぶとすればその慧明を頂いたことを彌陀の慈悲一如來の救濟として喜ぶべきであるがその喜びとは金が儲かつて喜ぶといふ人間慾の發現ではない。その喜びとは涅槃經に示された寂滅爲樂の境地であつて、即ち悲苦を越えたよろこび、苦樂を絶した樂しさといふことである

苦樂を絶した樂しさとはどういふことか。そも苦樂とは相対的な相棒の關係である、苦しみをはなれて樂しみといふものはなく樂しさを離れて苦しみといふものはない。換言すれば苦しみの小なるものが樂しさであり、樂しさの分量が一定の水準以下に減少した

ものが苦しみとなる。

この故に苦なからんと欲すれば樂なきに如かず、樹下石上、三衣一鉢の比丘生活には俗世間の樂しさが無いから、同時に亦た俗世間の苦しみが無い。これを中道と稱して不可なく、苦しむとせば亦た最樂の境といひて不可ないであらう。その最樂とは比較的に樂しみが多しとの意味ではなく苦樂ともなき眞際を佛陀は爲樂となし、極樂とせられたものであらう。

この故に極樂とは一切の満たされたる完成の世界である。そこには人間の苦しみがないから従つて人間的な樂しさもない。萬一にも左様な双對的な樂しさがあるとすれば何の時か樂しさの盡くる時がなくてはならぬ。その樂しさの盡くる時、やがて苦しみを生じそれは永遠の極樂とは成りかねるからである。

涅槃經に説かれた寂滅爲樂と三部經に示された極樂淨土とは本質において相等しいそれが涅槃の境地であり、その境地をこの現身に體得したものが悟りである。さうした涅槃寂靜の境地は悟り得ぬ凡夫として到りつくこと容易でない。その到り得ぬ煩惱具足の凡夫のために開かれたのが他力の

淨土門であつて、如來の本願力により聖道門にいふ大

五月節句の御祝品も安く良いので!!!

- 御座敷帳捕
- 武者人形
- 金太郎人形
- 外のぼり
- 布 鯉

當 撰

スガノヤ提灯店
電話九五

五月武者人形

特價大賣出し!

毎度格別ナル御同情ニ預リ難有御禮申上マス例年ノ通り御座敷帳及布鯉御道具類等一式豊富ニ取揃陳列致シマシタ御得意本位主義ニテ特價ニ差上マス。御一覽ノ程御待テ致シマス。

星叶號 加藤提灯店



旭硝子株式會社製品
板ガラス

- 赤菱印
- 菓子 壺
- 菓子 食器
- 其他 各種

松崎硝子製作所

平町新川町(電話一四二番)
仙臺市榮町(電話五九七番)

吉田眼科病院
平町新川町、電話六八番

平新川町一十九

外科 木村病院

- 産婦人科 院長 木村寅次郎
- 内臓外科 醫學士 内 木宗八
- 整形外科
- 器泌尿科

小兒科。 内科

特ニ乳幼兒ノ康健相談ニ應ズ。

平町 ねずみ坂
渡邊醫院
電話一六一番

五月人形陳列會

◎非常時日本の心意氣 尙武人形

◎品と値で常に祝品界をリードするフクダヤの名作品を御覽下さい。

- 御座敷飾セット 六圓ヨリ百五十圓迄
- 武者人形 一圓ヨリ三十圓迄
- 金太郎人形 五十錢ヨリ十八圓迄
- 五巾外のぼり 十圓ヨリ四十五圓迄
- 大鯉のぼり 二圓ヨリ四十八圓迄

- 春のトレンドコート 7.50ヨリ
- 春のバアバリー 3.00ヨリ
- 春の正札堂特製トソビ 8.50ヨリ 18.00マズ
- 春の紺セルネツミ セル外套 4.50ヨリ
- 春の三ツ組セビロ 7.50ヨリ

正札堂

電話四三六番

平四丁目停車場通り

好間村の炭礦地に

天然痘發生す

縣衛生課防疫官ら來郡

けふ眞性と決定

石城郡好間村北好間字堂田軌道運轉手川俣武一の妻わき(三)は二三日前から發熱し平町安齊醫師の治療を受けてゐたが二十四日夕刻に至り天然痘の疑ある旨の報告に接し平署では縣衛生課に報告二十五日渡邊防疫官、中會根村醫師、江戸平細菌検査所長らが臨床診断の結果同日午前十一時半に至り眞性天然痘と決定し直ちに同人を隔離し附近村民に對し急遽種痘の準備に着手したが傳染系統については目下調査中で同地は炭礦地帯だけに傳染の危険性多く極力警戒中である

青年の汽車往生

けさ腦病を悲觀して

今二十五日午前八時半頃常磐線草野平驛間神谷村地内を上り二四號旅客列車が進行中農家の子弟らしき一青年が飛込み頸部胴体を真二ツに轢斷即死を遂げ急報に依り四倉署員が檢視すると右は夏井村字藤間農留吉弟鈴木政行(三)で二年前より腦病に罹り治療中であつたが全治せぬのを悲觀した結果である

太田木起訴

公判は二十日

宮城縣伊具郡角田村生れ目下住居不定坑夫前科二犯太

保險魔に一年半

けふ平支部で判決

石城郡内郷村大字御厩野菜行商人太田三郎(三)が同村綴郵便局に勤務中昭和六年十一月頃より同七年九月頃迄の間自己取扱に係る同村字金坂水野テフ外六百名の簡易保険料千五百餘圓を横領し生活の爲めに費消した



明日のラジオ

今夜は北西の風晴
明日は北東の風晴
雲半す

今晚の部

後六〇〇 子供の時間
童謡劇「湊川合戦」影繪
座、にはとり座
後七、三〇 趣味講演の夕
「海の獵奇」「海の怪異」
浅井榮資「海難奇譚」井
關貢「航海奇譚」須川邦

貰つた領收書

巧みな詐欺

食つた内村郷役場

石城郡内郷村高坂小學校へ去る十五日午前十時頃訪ねた自稱郡山市仲町大澤文一(三)と稱する黒背廣に茶褐色のレンコートを着た男が内郷村役場から小學校の領收書の注文を受けたが見本は學校から貰へたと云はれたからと領收書を一枚受取り是に封紙代八圓米肉代四圓計十二圓と記入して内郷役場收入役齋藤彌平氏より巧に十二圓を詐取逃走したので目下平署で嚴探中である

少年溺死

遊戯中の慘

石城郡荷路夫村字明下居住農虎次五男同村小學校三年生齋藤久吉(二)は去る廿二日午後二時頃自宅前明下川河端畔で遊戯中誤つて轉落溺死した

復舊工事

平土木監督所管内七年度災害復舊工事として豫てより着手中であつた河川四、護

明日の部

前六〇〇 基礎英語講座
(二)岡倉由三郎
前九、一〇 料理献立「春
花内巻」河合拾松發表
前一〇、三〇 家庭講座
後〇、〇五 連續講談「森
の石松」第二席神田露山
後二、〇〇 家庭大學講座
後二、二〇 野球試合實況
東京野球聯盟リーグ戦
(豫備日)明治神宮外苑球
場より中繼

回職を求める方

△菓子製造見習 二十一才
高卒 給料面談(内郷村某)
△商店配達 三十七才 尋卒 給料面談(平町某)
△女中 二十八才 尋卒 給料面談(内郷村某)
△料理人 二十四才 尋卒 給料面談(平町某)

一冊の代金

御希望通りな

五冊の雑誌

自由に讀める

川崎巡回文庫

電六三〇番
申込次第(規則書進呈)

市原醫院

平町 田町
電話 一一四番

拾得六ヶ月

横領事件の判決

既報石城郡小名濱町字竹町雜貨商大森拾吉(三)が昨年十月頃隣人阿部コトより上京不在中留守番を頼られたのを奇貨とし衣類其他十二点價格四十五圓を窃取し入質横領した外前記コト加入の

満洲移民補欠 既報本縣の満洲國武裝移民採用者は既記の如くであるが今回更に補欠員として大浦村若松豊氏が採用された

平職業紹介所報告
回人を求める方
△女中 二十才以下 尋卒 給料面談(平町某)
△自動車助手 十八才 尋卒 仕着小遣(平町某)
△紙箱見習工 十六才 尋卒 給料面談(平町某)
△農夫 四十九才 委細面談(好間村某)

茶室

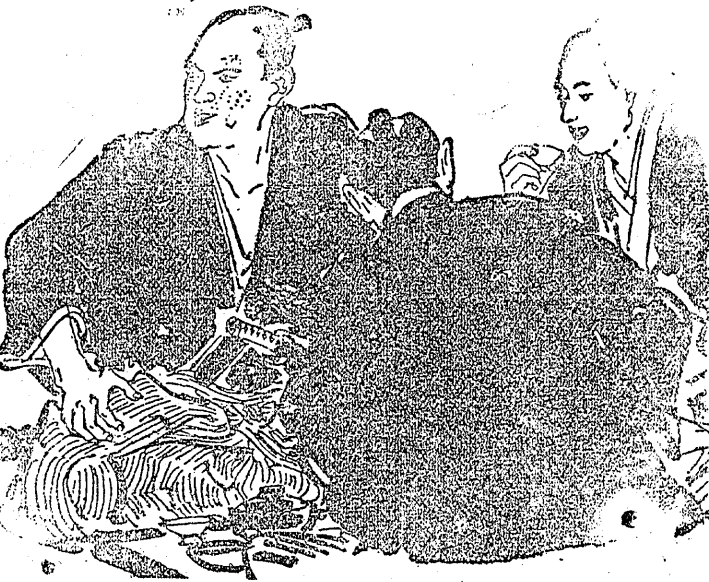
【禁轉載上演及映畫】

悟道軒圓玉演
近藤紫雲畫
上田馬之助

第三百四十七號

なすびの鵬焼を出せ

銀座一丁目の松田は有名な料理店早いと安いで評判を取つてゐる、今で申せば簡易食堂、しかしこれは高等です、今日天井と云ふ揭示は出ない、上田馬之助と緒方新三郎は話しながら盃を擧げてゐた、すると表の空の方に居つた三人の武士一人は二十七八、今一人は三十一二にもなるかもう一人は四十餘り膝元へ長い刀を引き付けて頻りに話しながら、飲んでゐたが三人共大分酔つてゐる、徳利が三十分本陳列してさながら徳利にて垣を結びまはした様、中にも顔に痘痕のある髪の中の縮れた色の黒い大兵な此の年長者は酒癖が良くない、四邊をデロリと唇を見渡してペロリと唇をなめ



な、ヤイコレもつと酒を持つて参れ
女「畏まりました」
甲「コレ待て待て肴が大分暴れた様だ、何ぞ變つた物を持つて参れ、田樂を拵へて來い」

甲「コレ女、コレ女中ちよつとこれへ参れ」
女「御用でございますか」
甲「何だと此奴御用でございますかとは、なんだ用事があればこそ貴様を呼んだ」
女「御免くださいまし」
甲「御免くださいましと申す以上は不調法をいたした

女「でんがくと申しますと」
甲「なんだと此奴、田樂を知らぬか、貴様は料理店の女中ではないか、田樂を知らぬとは扱々迂濶な奴だ、田樂とは豆腐に味噌を付けて焼いた物だ」
女「それならば存じて居り

女「存じてゐるならば何で問うた、早く持つて参れ熱い處を賞飮をいたす」
女「洵にお氣の毒様でございますが田樂は出来ません」
甲「田樂は出来ぬと此家は料理店であらう、さすれば客の求めに應じて料理一切は何なりとも調進せざるなまい、料理人に申し付けて拵へろ」
女「困りましたね、田樂は出来ませんよ」
甲「田樂が出来ぬとあらば茄子の鵬焼を拵へて持つて

女「存じませんよ、何處の川で捕れる魚でございますか」
甲「此女は馬鹿だな、何うだ前田此奴は茄子を知らぬ無學な奴だな、何處の川で捕れると申しゐる」
前「それは滑稽だコレ、女茄子と申すは畑に出来る茄子のことだ」
女「オヤ、貴下のお國では茄子のことを茄子と申しますか」
甲「馬鹿何處へ参るとも茄子と云ふが當然だ、その茄子の鵬焼を持つて参れ」
女「ナスの鵬焼などは聞いたこともございませぬ、あれは鵬焼でございます」
甲「ウーム鵬焼か、鳴だとして鳴だとして鳥ではないか、それを持つて來い」
女「おあいにく様でございます」
甲「よしそのおあいにくさまでも宜しい、味噌を付けて焼け」
女「御冗談ばかり仰有います」
○「ちよつとおきよさん、百番のお客様がお勘定です」
女「待つてくださいいよ今行きますよ、何卒且那多忙しんでございませぬから御注文を伺ひます」
甲「それだからナスの鵬焼を持つて参れと申して居るではないか」
女「そんな物は出来ませんよ」
甲「出来ないと云はせぬぞ、此家は料理店ではないか」

女「それでも今時ナスはございませぬ」
甲「なければ拵へろ」
女「そんな無理な事を仰有つては困ります……いやな奴だよあいつはこれだから安いお武士の酔漢には困つて了ふ」
甲「ヤイ待て、コレ女行つて了つたな、アハ、アハ、女にからかふは面白い、酔つた酔つた、頗る酷酔いたした、オウ隣に居るは職人らしいな、印半纏に腹掛甲斐々々しき扮装を致し居る」
コレ職人共今日は好い天気だな」
二人連れで飲んで居た若い者が
○「旦那よい御機嫌でございますね」
甲「酔つたぞまア一杯やれこれで飲め」
吸物椀を突き付けて
甲「美事に過せ拵者が酌をしてつかはす」

御用命は總て
常磐日刷印株式會社
電話三六〇番

專門
産婦人科
花柳病科
井坂醫院
入院隨意
平町田町 電話五五九番

木炭代用この上のない經濟の
徳用な 豆炭
壹袋正五貫目入金 八十錢也
御注文次第御届申シマス
三丁目(電話六六三番) 磐崎屋酒店
一丁目(電話五九六番) 菅本武雄商店
白銀町(電話二九九番) 水野氷店
六丁目 矢吹石炭商店
平驛前(電話三七番) 阿部石炭商店
◎特約店募集致シマス

玉屋洋品店
平町田町通電話五六六番